武雄中学校校内研究によせて

佐賀大学教育学部准教授　竜田 徹

1　問題の所在と研究の目的―生徒の学ぶ意欲を高める指導法の工夫―

学ぶ意欲を育てる大切さは、長年言われ続けてきました。それは学校教育における不易の使命です。教師は、学ぼうとしない生徒ではなく、学ぼうとする意欲をもった生徒が育つように願い、そのための授業の工夫を積み重ねてきました。

しかし、そうした工夫の積み重ねを上回る勢いで、時代の要請が高まってきました。つまり、変化し続ける状況に向き合い、学び続けようとする姿勢を伴った人間を育てることが重視されてきました。とはいっても、学校現場には、学ぶ意欲の育成よりも、知識・技能や思考力・判断力・表現力の育成のほうが注目されやすい事情もあります。学力調査、標準テスト、入学試験で結果を出すための指導と、学ぶ意欲の育成とを両立させることは容易ではありません。こうしたむずかしさのなかで、いま、従来から行われてきた関心・意欲・態度の評価に関する課題が表面化してきたといえるかもしれません。

そのようないまこそ、学ぶ意欲とその育成の意義を再確認し、ともすれば形骸化してしまった関心・意欲・態度の評価を再構築するときではないでしょうか。「生徒の学ぶ意欲を高める指導法の工夫」を主題とする本研究は、学ぶ意欲の育成に関する今後の実践および研究に、一つの明確な指針を与える研究です。また、今後の教育課程でいっそう重視される「主体的に学習に取り組む態度」（以下、主体性と記す）の指導法・評価法の構築に、いち早く、学校全体として取り組んだ研究でもあります。今後の学校教育を切り開く、先駆的・組織的な研究として大きな意義があるといえるでしょう。

このような意義ある研究に携わらせていただいたことを、心より御礼申し上げます。期間中、武雄市は大きな水害に見舞われました。また、コロナ禍による大きな制約もありました。そうした困難を乗り越えて、着実に研究を進めてこられた武雄市立武雄中学校の熊野辰未校長先生、主幹教諭の蓮田健先生、研究主任の宮嵜信仁先生はじめ、すべての先生方に心より敬意を表し、感謝申し上げます。

2　研究の方法―振り返りへの着目―

生徒の学ぶ意欲を高めるために、指導と評価をどのように行えばよいのでしょうか。本研究では、授業で行われる「学習の足跡の振り返り」（以下、振り返りと記す）を手がかりとしました。振り返りは、どの教科等でも実施でき、文字記録が残

表１　研究の課題

「学習の足跡の振り返り」は具体的にどのようなものにすべきなのか？

「…」を具体的にどう評価するのか。どういう記述を良いとするのか？　ＡＢＣを決める基準は？

ＡＢＣを決めたとして、３観点に移行した時の算定はどうなるのか？

「知識・技能等」「思考・表現・表現」と食い違いのない評価にするためにはどうすればよいか？

「…」から生徒の様子や特性をつかみ、これを活かした授業を展開するにはどうすればよいか？

るため、生徒一人ひとりの主体性の状況を把握するのに便利です。国立教育政策研究所が示す『学習評価の在り方ハンドブック小・中学校編』(2019 年 6 月) や各教科等の「参考資料」(2020 年 7 月) でも、「主体性」を育む手立ての一つとして取り上げられています。

この振り返りのあり方をめぐり、本研究では具体的な四つの問いが設定されました (表1)。研究を終えて、これらの問いにどのような答えや見通しが得られたでしょうか。これを振り返ることで、本研究の成果と今後の課題も明らかになるはずです。

3　なぜ主体性なのか――時的な意欲から持続的な意欲へ―

ところで、なぜ学ぶ意欲や主体性が重要なのでしょうか。

学校教育法第 30 条第 2 項では、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と述べられています。主体性の養成は「生涯にわたり学習する基盤」の一つとして位置づけられていることがわかります。

これを現代的状況と重ねると、主体性は表 2 に示すような力だと捉えることができるでしょう。「自立的な学習者」は、「学習意欲が継続・定着した生徒像」と言い換えることができます。授業開始時や授業中の学ぶ意欲も確かに大切です。しかし、そうした「一時的な意欲」は、「生涯にわたり学習する基盤」になるとはいえません。教師の目や通知表の点数を気にして、意欲のあるところを授業で見せるだけでは不十分です。これからは、学習終了以降も学習意欲を適切なタイミングで発動できるという、いわば「持続的な意欲」に注目することが必要です。

表2　なぜ主体性なのか

「答えのない時代」に、
将来の変化を予測し、
自分の「答え」を出すために
解決すべき課題や目標を適切に定め、
効果的に学んでいくことのできる、
自立的な学習者が備えている力。

「学習意欲が継続・定着した生徒像」

4　なぜ振り返りなのか―学び続ける方法として―

では、主体性の育成と振り返りはどのように関係するのでしょうか。それをまとめたのが表 3 です。たとえば漢字を学ぶには、何度も書く、ドリルを解く、覚える漢字を使って物語を作る、などたくさんの方法があります。重要なのは、生徒が自分に合った覚え方を知り、実行することです。自分には合っていないと感じたら、方法を切り替えなければなりません。そして、方法を切り替える契機となるのが振り返りです。

学び続けるとは、先を見通しながら、自分に適した学習目標と学習方法を模索

表3　なぜ振り返りなのか

なぜ振り返るのか。それは、
・解決すべき課題や目標を適切に定めるため。
・効果的に学べているかを確かめるため。

適切でない、効果的でないと評価したら、
目標を設定し直したり、
学び方を切り替えたりする。

し、実行することです。そのためには、振り返りを使うことが必要不可欠といえます。

5　振り返りの現代的意義―自分を支える学びのストーリーをつくる―

次に、振り返りの意義を現代社会という角度から考えてみましょう。いま、私たちは一人ひとりの多様性・平等性が強調される時代を生きています。それは見方を変えれば、自分の存在が見えにくい時代でもあります。一人ひとりちがうとは言われるものの、では自分にできることは何なのか、その答えはなかなか得られません。そうした現代を、社会学者の宇野重規は「答えのない時代」と呼び、そんないまの時代こそ自己変革をめざすときだと述べています（表4）。そして、そのためには他者とともに議論し続ける場をつくることが課題だと指摘しています。他の人がいるからこそ自分のことがわかるからです。

表4　現代社会と振り返り

「答えのない時代」を正面から受け止め、
まさにそのことを自律と自己反省の契機とすること、
静的で自己完結的な安定性ではなく、
動的な自己批判と自己変革を目指すこと、
そのために必要な他者を見いだし、
その他者とともに議論し続けるための場を
つくり続けること、これこそ、
〈私〉時代のデモクラシーの課題にほかなりません。

（宇野重規, 2010, p. 180）

現代を生きる生徒も同じです。自分と他の人はどのようにちがうのか、自分には何ができるのかを知りたいと願っているはずです。そして、そんな生徒の支えとなるものの一つが、振り返りです。振り返ることで、自分が積み上げてきた学びの足跡を確かめ、次の道筋を思い描くことができます（竜田, 2014）。振り返りは、いわば自分の学びのストーリーをつくる作業です。それを続けることが、新しい時代を生きていく大きな励ましとなるのです。

では、教師の役割は何でしょうか。それは、生徒の学びのストーリーをつくる機会が充実するよう、振り返りの方法を工夫することでしょう。その工夫の一つは、宇野も指摘している他者の視点です。振り返りにおける他者の意義を表5にまとめました。生徒にとって励みになるのは、自分の学びに他の人が関わってくれたり、反応してくれたりすることです。そのことは、自己理解を深める経験となります。振り返りは、そうした経験を互いに与えあう時間だといえます。その意味で、教室でともに学ぶ他の人は、生徒の「学びのストーリー」をより豊かにしてくれる「登場人物」だといってもよいでしょう。

表5　他者の必要性

振り返りは、個別に行うだけでなく、
他の人とともに行うのが効果的。

・他の人から学ぶことが自己修正の契機となる。
・他の人がいるから、自分の自分らしさがわかる。
・自分のかけがえのなさを実感する経験を
**　互いに与えあうことができる。**

振り返りは、「答えのない時代」に学び続けていくための主体性が育つ学習活動です。それは生徒にとって、自分の支えをつくり出す経験でもあるのです。

6　主体性の評価の「これまで」と「これから」

本研究では、これまでの関心・意欲・態度の評価がもつ課題を乗り越え、これからの時代

にふさわしい主体性の評価に再構築するための視点が明らかになりました。また、この視点を生かし、各教科等の特性を踏まえて、「学びの振り返り」のワークシート、評価規準、記載モデルが示されました。それらは研究報告集のなかで詳しく取り上げられています。以下では、本研究の成果を私なりに整理したものを、三点に分けて述べてみます。

一点目は、主体性の評価の「これまで」と「これから」です。これまでの評価のどのような点を、これからどのように変えていく必要があるのでしょうか。表6に、主体性の評価の改善にあたって着目すべき視点をまとめました。

項目別に概観すると、まず視点1は、生徒の心がけに任せるのではなく教師の働きかけを重視することを表します。視点2は、生徒の言葉を根拠に評価することです。振り返る活動は言語活動です。国語科の責任は大きいといえます。視点3は、主体性を「粘り強さ」と「試行錯誤」の二側面で見とることを示します（後者は「自己調整」と呼ばれることが多いですが、本稿では「試行錯誤」と記す）。視点4は、主体性を育てるための教師の言葉かけです。視点5は、主体性を伴った生徒の姿です。

表6　主体性の評価を改善する視点

視点	これまで	これから
1 教師のスタンス	生徒次第・出たとこ勝負で	意図的な指導の成果として
2 評価の根拠	授業態度、ノートをとる、挙手の回数、提出物を中心に	振り返りの文章や談話を中心に
3 評価の観点	関心・意欲・態度全般を一体的に	粘り強さの側面（教科らしさ）と、試行錯誤の側面（自己調整・学び方）とに分けて
4 働きかけ	「発表しよう」「提出物を出しなさい」「振り返ろう」「感想を書こう」といった指示文	「粘り強さ」と「試行錯誤」を引き出すための意図的な問いかけ文
5 評価からわかること	一時的な学習意欲 今学期どうだったか	持続的な学習意欲 来学期も学び続けていきそうか

表6の対比からわかるように、これからの主体性の評価では、「学習意欲は育成可能である」という考え方をもつことが重要です。教師によっては、生徒の学習意欲を固定的に捉える人もいるかもしれません。たとえば、「あの生徒は□□科の学習では意欲が高いが、○○科の学習では意欲が低い」という見方です。もちろん、生徒も人間ですから、教科等によっては関心・意欲・態度が低いこともあるでしょう。しかし、だからといって最初からあきらめるのではなく、「どうすればこの生徒は○○科の学習の魅力を実感できるだろうか」というかたちで指導を工夫することが求められます。それが教師の腕の見せどころです。そうした向上の余地のある生徒を見つけるために、主体性の評価はあるのです。

この表では、あえて「これまで」と「これから」を二項対立で示しましたが、これまでの学習評価に「これから」の側面がまったくなかったと言いたいわけではありません。また、

学習者の実態によっては双方の良さを組み合わせて運用することもできるでしょう。

7　振り返りの問いかけ文のモデル

二点目は、生徒が振り返りを書くときの問いかけ文の工夫です。このことは、表６の視点４にも示しました。これまでの関心・意欲・態度の評価は、教師から生徒への端的な「指示」で行われることが少なくありませんでした。これからの主体性の評価では、学習者が学びのプロセスを自覚的にたどり直せるように、また、粘り強さと試行錯誤の二側面が生徒自身の言葉で表現されるように、教師は意図的で具体的な「問いかけ」をすることが大切です。そのため、問いかけ文は従来よりも長くなると考えられます。

では、具体的にはどのように問いかければよいのでしょうか。本研究成果のなかから抜粋したものを表７に示します。各問いかけ文の丸数字①は、主体性の評価の観点のうち、主に粘り強さの側面に関わるもの、②は試行錯誤の側面に関わるものを示します。しかし、生徒が教師の問いかけ文のねらい通りに表現するとは限りません。実際に評価するときには、生徒の言葉に応じて、①②を柔軟に反映することが大切です。

表７　振り返りの問いかけ文のモデル ①：主に粘り強さの側面　②：主に試行錯誤の側面
①一年生の家庭科の授業を通してできるようになったことや、②家庭科の内容を勉強して気づいた、自分の生活を改善しなければいけないことを具体的に書いてください。
①言葉に注目し、よく考えることができたのは、どんなことか。／②誰（何）に刺激を受け、自分はどのように変わったか。／②その他、友人の変容など。全体の感想。
①仮説を確かめるためには、どのようなことがわかる資料があればよいですか。／②単元の学習を通して、新たにどのような疑問や考えが生まれましたか。／②今後も考え続けたいことは何ですか。今後の生活に活かしたいことは何ですか。
①わからなかった問題の、Ｐ（プロセス、解くための手順）とＧ（次に間違えないようにするための、頑張るポイント）をまとめよう。／②今日の取り組みを通して、できるようになったことや、新たに出てきた疑問点などをまとめよう。
②この単元で苦労した点や難しかったところはあったか。また、そのとき、どうしたか。／②この単元を学習する上で、自分なりに工夫した点や特に頑張ったところは、どんなところか。
②学び合いのひと場面（竜田注＝他の人と学び合ったシーンについての自由記述欄）／①数学的な用語を用いて、学習した際の気づきやポイントなどを蜘蛛の巣図に表そう。
①作品の説明（デザインのこだわり、頑張ったこと、工夫したことを書こう）／①友だちの「作品のよさ」を書こう／②本時の振り返りを書こう（学んだこと・新たな発見・私の感想など）
［理科の気づき］次のⅠ～Ⅲについてメモをしよう。根拠も書こう（評価に関わる「単元末の振り返り」を書くためのネタ集め）。／①授業を聞いてタメになった（気になった）こと。→生活のどの場面でそれを感じた？／②なぜ？　と思った説明や友達の発言。→どこが自分の意見と異なっていたのか？　どの

場面の説明が引っ掛かったのか？／②なるほど！　と思ったこと。→何が解決したからそう思った？誰のどんな発言（説明）がきっかけになった？
①Program○の授業や学習で特に頑張ったことを詳しく書きましょう。／①Program○の授業や学習で改善すべきことを詳しく書きましょう。／②Program○の授業（進め方や教材）で先生方にアドバイスや要望を書きましょう。

掲載に当たり、一部の表現を加筆修正し、丸数字と下線を追記した。

これらの問いかけ文は、下線を付した教科名などを別の言葉に置き換えることで、他の教科等にも応用できると考えられます。各教科等の特性や学習者の実態に応じて選んでいくことになります。

教師の問いかけ文が重要なのは、やがてそれを生徒が内面化し、高校生や社会人になって自分で学び続けていくときに、自分で自分にそのように問いかけたり、答えたりすることを促すからです。「今回の学習がうまくいったのは、学び方の工夫としてどんなことをやってみたからだと思う？」「AさんやBさんから意見を聞くことで、話し合いをするとこんなにもアイディアが深まることがわかった。次もやってみよう」というふうに、目標の立て方や学び方を身につけることにつながります。私自身も、本研究の過程で図1に示す「きっかけシート」を考案しました。この図の各カードに例示した、次の学びのきっかけとなるような言葉を引き出すことが、主体性の育成における教師の問いかけ文の役割です。

図1

8　振り返りの言葉を評価するルーブリックモデル

三点目は、振り返りの評価規準の明確化です。提出物の有無、挙手の回数、ノートのペー

ジ数などとちがい、振り返りの言葉を評価するのはむずかしく感じられます。しかしながら、主体性の評価が「持続的な学習意欲」ではなく「一時的な学習意欲」を評価するものに形骸化してきた一因は、挙手の回数のような数字で評価しやすい指標に依存したことでもあります。したがって、生徒一人ひとりの振り返りの言葉を評価する際のわかりやすい基準（ルーブリック）の開発は、今後の学校現場における重要な課題になるでしょう。

本研究を通して検討を重ねてきた振り返りのルーブリックモデルの暫定版を、表８に示します。今後の振り返りの実践を通して、各教科等の特性や学習者の実態に応じ、変更を加えてください。

表８　振り返りのルーブリックモデル暫定版

観点	①　粘り強さの側面＝教科の見方・考え方、教科への思い入れ、その教科ならではの用語・概念、教科らしさについて述べている。 ②　試行錯誤の側面＝授業内外での学びの自己調整、自己学習力の発揮、学習への向き合い方、学習のプロセス、学び方の工夫について述べている。
◆振り返りの記述において、<u>①②の側面とも、</u>	
A評価	・当該期間にその授業・単元・教科を学んだことがわかる具体的な記述である。 ・上のことを裏づける根拠や事例を挙げている。
B評価	・どの授業・単元・教科でも書ける漠然とした記述である。 ・書こうとしているが具体性に課題がある。
C評価	・一つも書けない。書こうとしていない。

表８では、下線部のように、主体性の二側面である粘り強さと試行錯誤を総合的に判断することとしていますが、それらを別々に評価することも可能です。粘り強さと試行錯誤をそれぞれＡＢＣで評価し、それを図２のような二次元のグラフの両軸に位置づけることで、総合評価を行います。図２は、国立教育政策研究所（2019）が主体性の評価のイメージとして示したもので、縦線と横線は私が書き加えました。仮に、「粘り強さ＝Ａ、試行錯誤＝Ｃ」の生徒を座標に位置づけると、総合評価はＣ「努力を要する状況」となります。逆に、「粘り強さ＝Ｃ、試行錯誤＝Ａ」の生徒の総合評価は Ｂ「概ね満足できる状況」となります。つまりこの図からわかるのは、主体性の総合評価においては、粘り強さよりも試行錯誤の育成が大きなカギを握っているということです。この図を必ず用いなければいけないわけではありませんが、粘り強さと試行錯誤の重みづけにちがいが設けられている点は知っておくとよいでしょう。

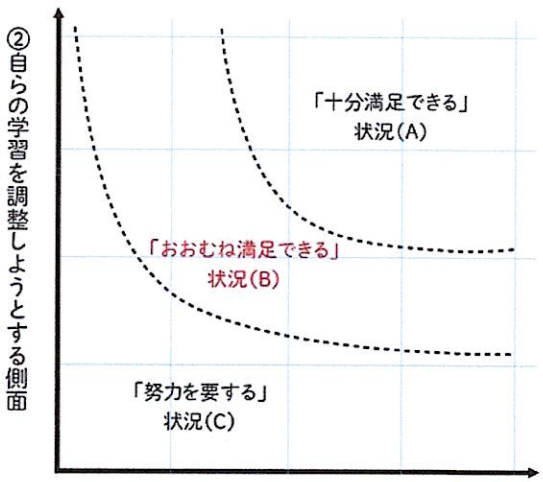

図２

学習評価の目的は、次の学習指導に役立てることです。ＡＢＣを明確にすることで、次はだれに何を指導するかが明確になりま

す。CやBの生徒がBやAになるように指導するわけです。まず、この学習評価の目的を常に念頭に置くことが重要です。また、Aと判断される具体的な記述例を教科内で共有することも効果的です。これは評価活動を円滑にし、評価の信頼性を高めます。さらに、文章を書くのが苦手な生徒や、振り返りの記述と実際の様子との間にギャップがある生徒には、個別のアプローチをすることも有効です。個別面談を実施したり（談話による振り返り）、授業中の観察を加味したりすることで、実際の生徒の様子と振り返りとの誤差を減らすことができます。そして、総括的評価の回数を精選しましょう。たとえば、成績に反映する評価対象は一つの単元に絞る、一学期間に一回にするなど、評価に追われる状況を回避するための作戦を事前に練り上げましょう。

9　今後の展望―教師の姿とエージェンシー―

最後に本研究の展望を述べて、結びとします。

一つは教師の姿です。教師がいきいきと学ぶ姿もまた、生徒の主体性を育む効果的な教材の一つなのではないでしょうか。そうだとすれば、教師が学ぶ姿を授業で見せるにはどうすればよいのでしょうか。教える姿なら生徒はたくさん見ています。では、学ぶ姿はどうでしょうか。主体的に学習に取り組む態度を教師自身がモデルで示す単元の開発を、今後のアイディアに加えていただけると嬉しいです。また、単元の評価のなかに「教師が学ぶ姿をモデルで示すことができたか」という観点を加えてもよいでしょう。

もう一つは、OECD（経済協力開発機構）の Education2030 プロジェクトで提唱されている「エージェンシー（student agency）」と呼ばれる概念との関連です。エージェンシーは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義される概念で（白井俊, 2020）、本研究における主体性の育成と深く関わりますし、今後の日本の教育政策にも大きな影響を与えると予想されます。変化に応じるためではなく、「変化を起こすため」の「力」として規定されていることが重要であると思います。

大きな展望のもとに、自分の足でできる創造を一歩一歩積み重ねる。それは本研究がめざす生徒像でもありますし、私たち教師の使命でもあると考えます。

【参考文献】

○宇野重規（2010）『〈私〉時代のデモクラシー』岩波書店
○国立教育政策研究所（2019）『学習評価の在り方ハンドブック小・中学校編』
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html（2021/2/25 確認）
○国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』同上
○白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来―エージェンシー、資質・能力とカリキュラム―』ミネルヴァ書房
○竜田徹（2014）『構想力を育む国語教育』溪水社